

## 災害と人間を考える

### —作家・辺見庸氏の場合—

広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科 鶴田 一郎

要旨：本研究では、作家・辺見庸氏の東日本大震災に関するテレビ番組を参照しながら、辺見氏の拠って立つ思想基盤の根本的転換に焦点を当てつつ、更に「人間にとって災害とは何か」について考察した。その際、辺見氏の言葉に従って「記憶と予兆」「神話的破壊と責任」「内省と言葉」に分けて考察した。その結果、辺見氏は、自身の現在も進行中の闘病生活、及び東日本大震災を経て、自らが最も小さき者の一人であると覚醒されたのではないかということが分かった。その証左に辺見氏がテレビ番組で「柔らかな口調と静謐な論理」になっていたこと、また「どんな人も生きていだけで価値ある存在である」という実感が伴った洞察をしていることが挙げられる。つまり、思想的基盤の転換とは辺見氏の実存の転換であり、「旧い辺見庸は死に、新しい辺見庸として生まれ変わった」ということである。

#### I. はじめに—問題の所在—

2011年4月24日(日)午前5時から6時にNHK教育テレビの『こころの時代～宗教・人生～』で「シリーズ 私にとっての『3.11』作家・辺見庸 瓦礫のなかから言葉を」(収録は3月下旬)が放送された。それまで辺見庸氏の少々挑戦的な口調とシニカルな論調に圧倒されて筆者は心から辺見氏の話に耳を傾けたことはなかった。しかし、この番組の辺見氏は異なっていた。静かに噛み締めるように言葉を紡いでいた。それは当初、辺見氏自身の病気によるものなのか、辺見氏が被災地・石巻の出身だからなのか分からなかった。

辺見氏は2004年3月、新潟での講演中に脳出血で倒れ、右手右足が麻痺するようになった。そのリハビリ中の2005年12月には結腸癌が見つかった(浜田2006)。その後、不如意な身体ではあるが、作家活動を続けていた。そして2011年3月11日に東日本大震災が起こった。その日、辺見氏は故郷・石巻にいたわけではなかったが、母親と妹が石巻にいて被災していた。番組を見ていくにつれ、自身の闘病生活と作家活動、故郷・石巻の無惨な状態、家族や友人・知人の被災、これらが不可分に混ざり合っ、表現としては柔らかな口調と静謐な論調になっていることが分かった。

本研究では、作家・辺見庸氏の東日本大震災に関する上の番組を参照しながら、辺見氏の拠って立つ思想基盤の根本的転換に焦点を当てつつ、更に「人間にとって災害とは何か」について考察する。その際、辺見氏の言葉に従って「記憶と予兆」「神話的破壊と責任」「内省と言葉」に分けて考察する。

「記憶と予兆」とは、故郷とは記憶そのものであり、その記憶は災厄の予兆を含んでいたことを指す。「神話的破壊と責任」とは、神話的破壊に直面して、自然や大いなるものへの畏怖を失念していた我々の姿に気づき、更には、神だけに責任を押し付けるのではなく、この世界に対する人間一人一人の責任性を考え直すことを指す。また「誠実さと言葉」とは、辺見庸氏にとって一人の人間とし

て起こったこと、つまり病気に罹り不自由な身体で生きること、及び東日本大震災で被災した故郷や故郷の人々の体験に関して誠実に徹底的に内省し、それらを作家として言葉に紡いでいくことが自らの使命であるということである。

## Ⅱ. 記憶と予兆

辺見庸氏は、若い頃、故郷の石巻を出て、大学は東京、就職は共同通信社に入り、約四半世紀、記者として世界を駆け巡っていた。共同通信社退社後も作家としての活動を続けてきた。1991年には『自動起床装置』(辺見 1991)で芥川賞も受賞した。このような自分は、よく言えばコスモポリタン、悪く言えば根無し草だと思っていた。つまり、辺見氏は自分には故郷はないと考えていた。しかし、東日本大震災を経て、作家としての自分の表現、つまり「私の言葉」を支えてきたのは故郷・石巻の記憶だったと気づいた。辺見(2012)では「故郷もまた記憶のことなのだと気づきました。失われ、壊されてみてはじめて鮮やかにたちあがってくる内面の風景——それが故郷というものではないでしょうか」(pp.18-19)と述べている。

東日本大震災の報道映像を見て、辺見氏は自分には故郷の「記憶」と共に災厄への「気配と予感と畏れ」があったことを思い出した。辺見(2012)では「言葉で言うと、物の気配、あるいは兆し。それからわたしが、自分の故郷の海の近くでいつも聞いていたような潮騒、海鳴り、それからもたらされるような予感、予覚です。そういうことに対して、もっと敏感であろうとしている」(p.38)と述べている。更に「畏れ」とは、畏れ畏れまる荘厳なもの、太刀打ちできないもの、また太刀打ちしてはいけないものである、と辺見氏は言う。故郷の記憶に伴う災厄への気配と予感と畏れ、とりわけ「畏れ」を我々は意識から排除する傾向になかったのか、津波は天災であるが、畏れを忘れた我々一人一人にある種の責任があるのではないか、辺見氏は自問自答する。我々は予感すべきだった。我々は言葉にすべきだった。今からでも遅くない。私＝辺見庸は書くことで誠実さを示すのだ。そのことが震災で亡くなった人、被災した人へ自分ができる唯一のことだと辺見氏は考えるに至ったのである。

更に辺見氏は、この東日本大震災を目の当たりにして次のような決意表明をしている。それはすなわち「われわれの身にいったいなにが起きたのか、なにが起きつつあるのか、それはどのような性質の出来事であるのか、なにが壊され、潰え、なにが生れたのか、このさきどんなことどもが出来しようとしているのか、歴史はこれからどう変わるのか——を感じとり、ひとつひとつ言葉にしていくのは、作家であるわたしの義務であり運命であると考えます」(辺見 2012,p.14)ということである。

この節の首題である「記憶と予兆」を最も集約的に表現していると考えられる辺見氏の詩「入江」(2009)を次に紹介する。

### 入江

入江にはなにもなかった／入江は影であった／入江は幻であった／入江は記憶であった／  
入江は寂寞であった／入江は森閑であった／入江は忘却であった／入江は鏡であった／入

江は瞑想であった／入江は<sup>とぼそ</sup>枢であった／入江は酷薄であった／入江は奸智であった／入江は狂気であった／入江は死であった／入江は死だけであった／入江は密事であった／入江は情欲であった／入江は殺意であった／入江はソラリスであった／入江は<sup>かんきつ</sup>奸譎であった／入江は神であった／入江はさらに奥まっていくなための／枢であった／入江は妄想であった／入江は哭いていた／入江は、そのかぎりにおいて、思想であった

まず白い道があった／海にいたる白い道があった／海岸と白い道を／堤防がへだてていた／堤防と白い道はTのかたちをつくっていた／堤防のだいぶてまえに／木造三階のジョロヤがあった／潮騒があった／オシロイバナが咲いていた／いつもなにかの気配があった／萬屋があり銭湯があった／気の触れた女が／亀の子タワシを売りにきた／その女の影がてらてらと濃かった／大きな性器の白人宣教師がいた／ときどき銭湯にきた／<sup>むくげ</sup>木槿が咲いていた／ジステンパーの犬が道を横切っていた／犬は鼻汁を垂らしていた／馬のいなくなった厩舎があった／淋病の女と刺青の船乗りが／わらのうでで昼寝していた／ゲルマニウム・ラジオから／モスクワ放送が流れていた／あたりは馬の小便くさかった／なにかがもうすぐ起きそうであった

堤防の左が灯台、右にどこまでも行くと／あの入江だった／堤防の左にはよく陽がさし、右は蔭っていた／灯台のちかくではイシモチが釣れた／みな左側に行き、右側には行かなかった／右側にはジョロヤの者たちが行った／ぼくは堤防を右側に歩いていった／吃音のカツヒコちゃんをたまに連れていった／たいていはぼくひとりだった／カツヒコちゃんはぼくのいいなりになった／カツヒコちゃんは無口だった／カツヒコちゃんは秘密をまもった／カツヒコちゃんと堤防の右側に行ったが／入江までは連れていかなかった

堤防をどんどん行くと／トロッコの線路があった／線路は錆びていた／トロッコも錆びていた／ぼくはトロッコに乗り／カツヒコちゃんに後ろを押させた／カツヒコちゃんは一生懸命押してくれた／トロッコは病んだ老人の呻きのような／音をたてた／灰色の上空を鳶が飛んでいた／さかんに旋回していた／鳶は陰気だった／ぼくは鳶を驚と思いこんでいた／砂浜におりた鳶めがけて／石をなげたが、あたったためしかなかった／堤防を海側におりると松林があった／松林にはハマエンドウやマツヨイグサが／咲いていた／それらを押ししだいて／痩せた女があおむいていた／刺青の男がのしかかり／ゆっくりうねくるように／腰をつかっていた／鳶が鳴っていた

トロッコ小屋に錆びたトビロがあった／メンタムがあった／浣腸の容器もあった／ひしゃげた薬缶があった／古い血のついた新聞紙があった／ぼくはカツヒコちゃんに告げた／秘密だよ いったら殺されるよ／ある日は松の枝で男が首を吊っていた／赤い女物の浴衣をまとっていた／なにかくぐもった音がした／たぶん躰の音だった／男はハマエンドウのう

えに液を垂らしていた／液は金色に光りポトポト滴った／男の小指の先が幽かに震えていた／ぼくたちは松のかげから見ていた／ミルクーを食べながら見ていた／カツヒコちゃんが喉の奥で笑った／ひくひくと笑った／笑いやまなかった／泣いていたのかもしれない／ぼくはだれにもいうなと囁いた／カツヒコちゃんが激しく頷いた

カツヒコちゃんを途中で帰した／だれにもいうなと念を押した／カツヒコちゃんはいっしょに行きたかった／帰れとぼくはつよくいった／カツヒコちゃんは横隔膜が引きつったみたいな音をとてて帰っていった／小走りに帰っていった／引きつる音が遠ざかった／ぼくは堤防のうえを歩いた／ひとりで歩いた／なにかの気配を感じつつ歩いた／蛇がよこぎった／ぼくはどこまでも歩いた／歩いた／葦の原が見えてきた／しだいになにかが兆していた／ぼくはカツヒコちゃんをすでに忘れた／父をすでに忘れた／一度だけ、父を入江に誘った／釣りに行こうよ／入江には魚が棲まなかったのに／釣りに誘った／「釣りさ行くべ」／入江にはだれもいなかった／ぼくは父になにをしようとしたのだろうか／漲っていたものをどうしたのだろうか／入江で父はずっと無言だった／ぼくも無言だった／<sup>にかわ</sup>膠のように押し黙っていた／入江まで自転車でいき／無事に自転車で帰った／帰宅してからも眼を合わせなかった

入江はガーネット色によどんでいた／疲れた血の色だった／父を誘ったときには／半透明の胆礬<sup>たんぱん</sup>色だったのに／いかにもあつらえたみたいな青空の色だったから／かえて怪しかったのだ／ぼくは葦の原にもぐった／うずくまって身を隠した／入江にはなにもなかった／太陽<sup>かき</sup>に暈がかかった／鼓膜がどうになつたと錯覚するほど／音が死んでいた／入江がゆっくり兆していた／葦は影絵だった／入江は孕んでいた／入江は疲れを孕んでいた／入江は疲労であった／疲れの底に、ふとどきな気配もあった／だが、だめかもしれない／もうだめかもしれない／それでも油断はできなかった／ぼくは葦にひそみ／葦と葦の間から／入江を見つづけた／入江の中央に／銀色の水柱がそばだつのを／ざわっと聳<sup>そび</sup>えるのを／じっと待ちつづけた

### Ⅲ. 神話的破壊と責任

辺見氏が東日本大震災を見て最初に思ったのは自分が海外特派員として取材した戦争や紛争地域に惨状が似ているということだった。辺見(2012)では「地震と津波の現場が、空襲や核爆発の現場に似る、そんなことも起きうるのだ」(p.52)と述べている。そして、その現場は「町全体がずれていく」(p.68)ような惨状であり、その内実を想像してみると、爆撃のような金属的断裂であったのではないかとも言う。辺見氏のある友人はけっして大げさなことを言う人ではないが、惨状を見て「地獄だ!」と一言言った。また別の友人は「いっさいが整合しない。事実がすべてばらばらになって、ひとつのことがどうも他と結びつかない」(辺見 2011a,p.304)と語り、更に別の友人は「事実がどーんとたちあがったけれども、それらにみあうことばがない。ことばは事実におくひきはなされている」

(辺見 2011a,p.304)と語ったそうである。このように「廃墟にあつてはしばらくのあいだ一切の問いという問いがかき消えるのだ。原爆のときもそうであったと聞く。ひたすら奇幻にうちのめされ<sup>まよ</sup>恐懼して自失する。ああそうだったのか、というおもいと、なぜこうなのかという疑念が妙にとけあつて、あるべき問いはなかなかたちあがらない」(辺見 2011a,p.305)と辺見氏は言う。

テレビに映らない津波の中の様子はどうかだろう。コンクリートをも切断し流れていく津波の中で人体はどうなるのだろうか。手と足がバラバラになって、その一つづつは人間存在という全体を失って単なる部位になるのではないか。物化するのではないか。辺見氏は次のように語る。「たんなる物体にすぎないことと、たんに物体ではないこと。そして、たんなる物体にすぎなくなることと、それでもたんに物体ではないこと。ふたつのことなる事態のあわいには、しかしながら、ゆるやかにわれわれを得心させてくれる変現のプロセスがあるようであり、ない。大いなる日が来て、はじめて、はっとこころづいたのである。よるべきはなにもない。ひとはある日、ゆくりなくモノになるのだ」(辺見 2011a,p.305)。

それでは東日本大震災は宗教的預言あるいは天罰なのか。「それは絶対はない！」と辺見氏は主張する。『新約聖書』(新共同訳)の終盤にはヨハネの黙示録があり、その第6章12節13節では「小羊が第六の封印を開いた。そのとき、大地震が起きて、太陽は毛の粗い布地のように暗くなり、月は全体が血のようになって、天の星は地上に落ちた」とあり、更に第17節では「神と小羊の怒りの大いなる日が来たからである。だれがそれに耐えられるであろうか」と言っている。ヨハネの黙示録では人間の王国が<sup>ことごと</sup>悉く滅びて、神の完全な世界が再び創られていくとされるが、辺見氏は「それで救いがあるのか！」と反発する。

この部分を解説して今道(2000)では第六の封印の開封は「救いの歴史の結論の預言的先どり」(p.113)と述べている。ここで述べられている天変地異は「特別荘厳な神の臨在の象徴」(p.114)なのであり、神と小羊の怒りの大いなる日とは「神の裁きが行なわれる日」(p.114)を指す。つまり「神が歴史のなかに特別に介入し、悪を滅ぼし、イスラエルが主に向き直るように刺激するとき」(p.114)を意味するのである。したがって、聖書解釈上においても、「天罰が下される」という意味ではなく、神の怒りは不正を徹底的に排除するが、そこで救いの歴史が終わるのではなく、その次またその次と救いの完成を目指して歩んでゆくのである。繰り返すが、東日本大震災は辺見氏が言う通り「けっして天罰ではない」のである。

しかし、「宗教的預言」という言葉の方は、若干検討が必要であろう。「預言」とは「神から預かった言葉」という意味であり、聖なる存在により伝えられ、人間に福音をもたらすものである。つまり上の聖書の一節は「救いの完成を目指して神が進んでいかれる預言」ということであり、その意味では「預言」なのであるが、運命論的決定論的「予言」(将来起こることを予想すること)ではないということである。ただ、そこに本当に救いがあるのかという点については筆者も辺見氏ほどではないが、若干の疑問は残るのである。

一方、辺見氏は東日本大震災を「宇宙の一瞬のくしゃみ」ではないかと言う。しかし、その「宇宙の一瞬のくしゃみ」「大自然、宇宙的な規模でいう大自然の、一瞬の、一刹那の身震いのようなもの」(辺見 2012,p.32)が人類の破滅につながるとも言う。東日本大震災は数値化が不可能な過去のデータも

何も適用できない「いうならば神話的なまでの破壊なのであり暴力であった」(辺見 2011a,p.306)のである。過去のデータは絶対ではない、原発は本当に安全か、宇宙の摂理にあっていないのか、次々と問いを発する辺見氏の内面で認識論上の修正が起きる(辺見 2011b,p.8)。それは端的に言えば「ありえないことはありえない」である。かつて未来は①ありえないこと(the impossible)、②おこりうること(the probable)、③避けられないこと(the inevitable)に大別できた。しかし、東日本大震災を経た現在では①は全否定される。つまり①は解消され、②③に収斂されるのである。「ありえないことはありえない」は無論「絶対的に(inevitable)」(辺見 2011b.p.8)である。つまり世界の未来は「おこりうること・避けられないこと」に収斂されるのである。

また、この辺見氏の認識論上の修正は「出来事の反復性」(辺見 2012,p.70)への省察にも及ぶ。辺見氏は『旧約聖書』(新共同訳)の「コヘレトの言葉」第1章を次のように引用する。「何もかも、もの憂い。語り尽くすこともできず 目は見飽きることなく 耳は聞いても満たされない。かつてあったことは、これからもあり かつて起こったことは、これからも起こる。太陽の下、新しいものは何ひとつない。見よ、これこそ新しい、と言ってみても それもまた、永遠の昔からあり この時代の前にもあった。昔のことに心を留めるものはない。これから先にあることも その後の世にはだれも心に留めはしない」(第8節から第11節)。「コヘレトは言う。なんという空しさ なんという空しさ、すべては空しい」(第2節)。このように引用して辺見氏は、これからも国家間の摩擦・紛争・戦争、内戦、飢饉、病気、地震、津波、洪水、旱魃、そしてまだ見たこともない<sup>いさか</sup>諍い、いまだ聞いたこともない墮落と荒廃は避けがたく絶対的に起こり得ると断言している。そして東日本大震災を経験した我々は「なんという空しさ なんという空しさ、すべては空しい」という言葉に自らを重ね合わせるのである。

この問題についてローデル,J.A.(1994)・小友(2004)を参照しながら更に検討を続ける。ヘブライ語の「コヘレト」とは本来は固有名詞ではなく「会衆を集めるもの」という意味であるとされてきたが、定説はない。「コヘレトの言葉」はいわゆる「知恵文学」に属する。知恵文学とは、神による啓示ではなく、人間の日常的な経験に基づく知恵に関する文書を指している。したがって、その視点からの考察が必要になってくる。「すべては空しい」という厭世的な表現を吐くのは人間であり、知恵の秩序の乱れを嘆くものである。知恵の秩序とは、正義により幸福が、悪により不幸が及ぶという因果論であるが、コヘレトでは正義により不幸が、悪により幸福が得られるという世界認識の逆転が見られるのである。言うなれば知恵の秩序の崩壊である。コヘレトでは決定論も成り立たない。決定論とは物事のすべては神によって決定され、この世の終わりの時も決定しているということである。

しかしコヘレトは、神が時を決定したが、人間にはそれを認識できないと語る。「コヘレトの言葉」第11章では「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。七人と、八人とすら、分かち合っておけ。国にどのような災いが起こるか 分かったものではない」(第1節から第2節)とある。災いは決定されてはいないが、災いが絶対起こらないと神の啓示があったわけではない。将来のことは何も決定していないのであるから、「自分で知恵と力を尽くして、とことんまで努力せよ」(小友 2004,p.94)ということである。人間に全責任が付与されているのである。このことから示唆されることは、将来どうなるかはわからないから諦めたり自暴自棄になった

りするのではなく、将来どうなるかわからないからこそ、また災厄は必ず繰り返されるのだからこそ、それに備えておけ、ということであろう。つまり、「コヘレトの言葉」における非決定論が我々一人一人の責任性を問うているのである。

この節の首題である「神話的破壊と責任」を最も集約的に表現していると考えられる辺見氏の詩「あの破壊は他からの暴力だろうか」(2011c)を次に紹介する。

#### あの破壊は他からの暴力だろうか

わたしらの夜をついに鑄つぶしにきたのか。／むじひに罰しに。／くされた球茎に気づかぬわたしらを、／<sup>た</sup>矯めなおしにきたというのか。／あほうどもの腸でこしらえた弦の音に／いつまでも踊らされるわたしらの性根を、／やっぱり叩きなおしにきたのか。／そう言いたくなるのもわからんでないけれど、／真相はこうなのだ。

宇宙がちょっと身じろぎ、／はずみで／聖人掘緑地のいけがきの／真っ赤に熟した／ヒマラヤトキワサンザシの実がひとつ、／落ちてころげて、／海にぼちちゃんと入り、／かすかな漣をつくっただけの話だ。／じつに無ほどに小さな漣を。

真っ赤な／ヒマラヤトキワサンザシの実は、／わたしのなかに熟し、／ある日 ひと粒が／ゆくりなく宇宙の海に落果した。／おのずからの暴力。／かすかなその<sup>さざなみ</sup>漣で世界が絶えることもあることを。

とりかえしのつかぬ罪は——／それらをこぼむ無知。／宇宙の海はわたしのからだのなかに、／うねりただよう。／あがなえぬ海。／かすかなその漣で世界が絶えることもあること。

とりかえしのつかぬ罪は、／語りとどかぬ、予感しないことば。／それが<sup>ばんこ</sup>盤古をあやめる大罪となった。

#### IV. 誠実さと言葉

カミュが1947年に発表した小説『ペスト』に辺見氏は注目する。『ペスト』の大要は次のようなものである。物語の端緒は、医師ベルナール・リウーが階段で発見した死んだ鼠だった。やがて、熱病による死者が出始め、リウーは死因がペスト菌の感染であるに気付く。それを新聞やラジオが報じてしまい、アルジェリアのオラン市はパニック状態に陥る。当初は楽観的だった市当局者も、死者の数は減るどころか増える一方になり、その対応に四苦八苦するようになる。ついに市は外部と完全に遮断される。市から脱出不可能の状況で、市民の精神状態も限界まで達する。新聞記者のランベールが妻のいるパリに脱出したいということで、犯罪者のコタールが密輸業者を紹介する。コ

タールは逃亡者で人生に絶望しており町を出る気は毛頭なかった。イエズス会のパヌルー神父は、ペストの蔓延は人々の罪過が原因で回心して悔い改めよと説教する。

その一方で、医師のリウー、よそ者のタルー、作家志望の下級役人のグランは患者の治療を必死に続ける。ランベールは脱出計画をリウー、タルーに打ち明けるが、彼らは町を離れる気はない。それというのも、まだすべき仕事が残っているからであった。ランベールは、リウーの妻も市の外にいて病氣療養中だということを聞く。ランベールは考えを改め、リウーたちの手伝いを始める。そのような時、少年が苦しみながら死んでいった。そのことも罪過が原因だと言うパヌルー神父に、リウーは冷静に抗議する。そのパヌルー神父もペストで死んでしまう。この世には神の赦しや救いが無いのだと、この世の不条理を人々が深く実感した時、ペストの蔓延という地獄のような災厄は急に突然、潮が退いたように終末を迎える。そして徐々に人々は以前の生活に戻ってゆく。ランベールは妻と再会でき、コタールは警察に逮捕され、タルーはペスト菌におかされて死亡する。そして、リウーは療養中の妻が死んだことを知らされるのである。

辺見氏は、新聞記者のランベールが脱出計画を打ち明ける際に医師のリウーが答える次の言葉に注目する。「今度のことは、ヒロイズムなどという問題じゃないんです。これは誠実さの問題なんです。こんな考え方はあるいは笑われるかもしれませんが、しかしペストと戦う唯一の方法は、誠実さということです」(カミュ, A.1969, p.245)。「人は人に対して誠実であること、それが大切なのだ」と説く作中の医師リウーの言葉を辺見氏は軽視していた。しかし、自身が病に陥り(辺見・土本 2010)、そして東日本大震災に遭遇して、このリウーの言葉が胸に沁み入るといふ。誠実であること、混乱の極みであるからこそ、いつもより優しく、誠実であることが大切であると辺見氏は考えるようになった。そして、今、問われているのは統計で示される被災者数ではなく、一人一人がかけがえのない個人としての人間である。元より人間は常にどの人も例外的であり、統計の数として十把一絡げにまとめることはできないのである。

東日本大震災で被災された高齢者の方で「若い人が沢山亡くなられたのに、自分のような何の役にも立たない年寄りが生き残った。自分が死ねばよかった」と考えている人が少なからずいる。辺見氏は、そのような人こそ、生きるべきなのだのように強く主張する。この人は、若いから、有能だから、社会に役立つから生きるべきだ、では決してない。若くもなく、有能でもなく、社会に役立ちもしない人、それを敷衍<sup>まげん</sup>していけばどんな人も等しく生きていける社会が必要なのだ。つまり、どのような人も、生きていだけで、それだけで価値ある存在であることを頭でわかるだけでなく心でわかって生きていく社会が必要なのである。

そのような社会を実現するのに必要な第一歩は「言葉」を紡ぎ被災した人々へ届けることであると作家である辺見氏は主張する。言葉とは、人に対する関心の現れであり、創造力につながる想像力である。被災された人々と共に辺見氏は痛んだ。その痛みの念と共に被災した人々へ言葉を届ける。死亡者数として統計的にまとめられた人々にではなく、文字通り、一人一人の人、一人一人の死へ言葉を届けるのである。換言すれば、外部(破壊された廃墟)に対する新しい内部(腑に落ちる内面/私という個的な存在)を自分の力で掘り進めなければならないと辺見氏は主張するのである。

この節の首題である「誠実さと言葉」を最も集約的に表現していると考えられる辺見氏の詩「死者



にことばをあてがえ」(2011d)を次に紹介する。

死者にことばをあてがえ

わたしの死者ひとりびとりの肺に／ことなる／それだけの歌をあてがえ／死者の唇ひとつ  
ひとつに／他とことなる／それだけしかないことばを吸わせよ／類化しない／続べない／  
かれやかのかのじょだけのことばを／百年かけて／海とその影から掬え／砂いっぱいすくの死者に  
どうかことばをあてがえ／水いっぱいすくの死者はそれまでどうか眠りにおちるな／石いっば  
いの死者はそれまでどうか語れ／夜ふけの浜辺にあおむいて／わたしの死者よ／どうかひ  
とりでうたえ／浜菊はまだ咲くな／畔あはれ唐菜とうなはまだ悼むな／わたしの死者ひとりびとりの肺  
に／ことなる／それだけのふさわしいことばが／あてがわれるまで

V. おわりに—まとめに代えて—

本研究では、作家・辺見庸氏の東日本大震災に関するテレビ番組を参照しながら、辺見氏の拠って立つ思想基盤の根本的転換に焦点を当てつつ、更に「人間にとって災害とは何か」について考察した。その際、辺見氏の言葉に従って「記憶と予兆」「神話的破壊と責任」「内省と言葉」に分けて考察した。

「記憶と予兆」とは、故郷とは記憶そのものであり、その記憶は災厄の予兆を含んでいたことを指す。その災厄の予兆の中に含まれる「畏れ」の意識を排除する傾向が自分にもあったことを辺見氏は率直に反省する。その思いは「入江」という詩に集約的に表現されていた。

次の「神話的破壊と責任」とは、神話的破壊に直面して、自然や大いなるものへの畏怖を失念していた我々の姿に気づき、更には、神だけに責任を押し付けるのではなく、この世界に対する人間一人一人の責任性を考え直すことを指す。辺見氏は聖書を引用しながら、東日本大震災は決して天罰ではないが、今後必ず起こりうる災厄に備えて自らの知恵と力を尽くすことの重要性を示唆している。その考えは「あの破壊は他からの暴力だろうか」という詩に集約的に表現されていた。

そして「誠実さと言葉」とは、辺見庸氏にとって一人の人間として起こったこと、つまり病気に罹り不自由な身体で生きること、及び東日本大震災で被災した故郷や故郷の人々の体験に関して誠実に徹底的に内省し、それらを作家として言葉に紡いでいくことが自らの使命であるということである。カミュの『ペスト』の中で医師リウーが主張する「誠実さ」に辺見氏は大きな共感を寄せ、更には、どんな人もかけがえのない人間として生きていける社会の構築に向うべきだと主張する。その際、外部(破壊された廃墟)に替わって新しい内部(腑に落ちる内面／私という個的な存在)を自分の力で掘り進めなければならないことが強調されている。このことは「死者にことばをあてがえ」という詩に集約的に表現されていた。

最後に辺見氏の拠って立つ思想基盤を根本的に転換させたものは何かということだが、これはあくまで筆者の推測だが、「最も小さき者」というキリスト教の概念が参考になると考えている。聖書による「最も小さき者」とは、子ども、女性、病気の人、障害のある人、飢えている人、身体を売る人、罪人、奴隷、取税人、羊飼いや豚飼いやなどの牧畜人、行商人、小売商人、日雇い労働者、門番・

女中・給仕などの奉公人、サマリア人、異邦人などを指す。これらの人々は、才能、財産、地位、教養もなく、強い者から、疎んじられ、蔑まれ、虐げられ、痛めつけられ、押し潰されていて、一見、自分の内にも外にも自分を支え衛る力を見出せない人々である。

辺見氏は、自身の現在も進行中の闘病生活、及び東日本大震災を経て、自らが最も小さき者の一人であると覚醒されたのではないか。その証左に「はじめに」で述べた辺見氏がテレビ番組で「柔らかな口調と静謐な論理」になっていたこと、また「どんな人も生きていだけで価値ある存在である」という実感が伴った考察をしていることが挙げられる。つまり、思想的基盤の転換とは辺見氏の実存の転換であり、「旧い辺見庸は死に、新しい辺見庸として生まれ変わった」ということであろう。

#### 引用文献

- カミュ,A.(1969)『ペスト』(宮崎嶺雄訳)新潮社。
- 浜田奈美(2006)「言論 ひとり、地をはう抵抗 辺見庸は沈黙せず」『アエラ』(朝日新聞社)19(37)、pp.34-36。
- 辺見庸(1991)『自動起床装置』文藝春秋。
- 辺見庸(2009)「入江」辺見庸(2010)『詩文集 生首』毎日新聞社、pp.28-38。
- 辺見庸(2011a)「神話的破壊とことば——さあ、新たな内部へ」『文藝春秋』89(5)、pp.303-307。
- 辺見庸(2011b)「標なき終わりへの未来論——パノプティコンからのながめ 生きのびることと死ぬること」『週刊朝日』116(11)、pp.6-13。
- 辺見庸(2011c)「あの破壊は他からの暴力だろうか」辺見庸(2011)『眼の海』毎日新聞社、pp.68-70。
- 辺見庸(2011d)「死者にことばをあてがえ」辺見庸(2011)『眼の海』毎日新聞社、pp.47-48。
- 辺見庸(2012)『瓦礫の中から言葉を——私の<死者>へ』NHK出版。
- 辺見庸・土本亜理子(2010)「私たちは他者の痛みを痛むことができるか」『地域リハビリテーション』5(7)、pp.576-581。
- 今道瑤子(2000)『ヨハネの黙示録を読む』女子パウロ会。
- ローデル,J.A.(1994)『伝道の書 コヘレトの言葉』(片野安久利訳)教文館。
- 小友聡(2004)「『コヘレトの言葉』と知恵の倫理的な世界観」『東京神学大学紀要』7、pp.89-100。